

# 教員研修の現況と魅力的な研修の実施

こいぬま のりあき  
肥沼 則明

埼玉大学・神奈川大学・早稲田大学大学院非常勤講師  
元筑波大学附属中学校主幹教諭

## 要 旨

- ★法律に規定されるまでもなく、教員は口で  
るから自分の意志で研修を行うべきである。
- ★研修には強制参加型と自由参加型がある。
- ★魅力的な研修の実施には、適切な講師の  
人選と受講者を飽きさせない形態および内  
容が必要である。
- ★同僚との学び合いが研修の第一歩である。

## はじめに

筆者は、本年三月末をもって三十七年間に及ぶ中学校（および高等学校）教員としての職務を定年退職した。その教員生活を振り返ると、若いころを中心にこれまでに教え切れないほどの研修会に参加して、教師としての資質を高めることに努めてきた。一方、三十年代後半くらいからは主に教科（英語）教育関係の研修会の講師を務めるようになり、本稿執筆時点で計一三五回それを実施してきている。また、本稿の執筆とは無関係にまったく

の個人的な関心から、全国の教育委員会でのような研修会が行われているかを調査したこともあった。

以上のような経験から、教員研修の現況を明らかにしたうえで魅力的な研修とはどのようなものであるのかを、受講者側と主催者（講師）側の両方の立場から見えて提案してみようというのが本稿の趣旨である。

## 1 研修の必要性

教員の研修の必要性については、「教育公務員特例法」第二一条に「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない」と示されている。つまり、教員は自身の指導力の向上を目的として常に研修に取り組まなければならない。一方、さきの条文には「教育公務員の任命権者は、教育公務員の研修について、それによ

する施設、研修を奨励するための方途その他研修に関する計画を樹立し、その実施に努めなければならない」とも記されている。各自治体が各種の研修会を企画し、対象となる教員に参加を促す（ときに強制する）のはそのためである。

教員の立場から見たとき、研修を行うことは「権利」であり「義務」であると言われるのはこの法律の条文からきていると思われる。もちろん、法律に定められなくとも心ある教員であれば、よりよい教師になるために、何らかの方法で常日ごろから自主的に研修を行っているであろう。同じ研修を行うのであれば、「義務」と感じるより「権利」とらえて前向きに行いたいものである。そして、研修を主催する側には、教員にそのような意識をもってもらえるような研修を企画・運営していただくことを望んでいる。

## 2 研修の現況

### (1) 研修の主催者と形態

教員の研修という点、一般的には自治体が主催するものを思い浮かべるが、それらは「官制研修」または「行政研修」と呼ばれ、多くは強制参加の形式で行われる。しかし、研修の主催者にはほかにもいろいろなものがある。

例えば、多くの地域には「〇〇研究会」のような組織がある。行政側の指導で始まったものもあれば、教員たちの自主的な活動が定着したものもあるので、「半官半民」の主催者と言ってもよい。また、ほとんどの学校では研究主任等を中心とした校内研修も行われているようである。これらも官制研修と同様に勤務時間内に強制参加の形式で行われるのが一般的であろう。

一方、各教員の自由意志で参加できる研修も多い。各種学会等が主催する研修会がその代表例であり、筆者が参加してきた研修会の多くもこれである。これらの中には、会則などがある正規の団体以外に、数名から数十名程度で構成される有志団体や個人が主催する研修会もある。これらの多くは教員が運営しているものであるが、最近では民間企業が教員向けに開く研修会も増えてきた。ただし、これらの研修会の難点は勤務時間外に参加しな

ければならないことや多くは有料であるという点である。さらに、これらの多くは大都市周辺で行われており、地方の教員が参加しづらいという難点もある。もともと、最後の点についてはオンラインで参加できる会が年々増えてきており、コロナ禍でそれがいつそう加速されて以前よりも格段に参加しやすくなった。今後はコロナ禍が収束したあとも、オンラインや対面とオンラインの「ハイブリッド型」の研修会が増えるであろう。

### (2) 研修の内容

官制研修以外の研修は設立された目的ごとに内容が多岐にわたっている点で、ここでは官制研修にしぼってその内容を見ていくことにする。筆者が二〇二一年の秋から冬にかけて全道府県およびおおむね人口十万人以上の市、計約三三〇の自治体のホームページで調べたところ、教員の研修に関して次の二つのことがわかった。

一つは、研修の企画・運営を担当する部署である。ほぼすべての道府県や政令指定都市では「教育センター」という機関が研修を担当しており、その他の自治体では「学校教育課」または「指導課」と呼ばれる組織が担当していることが多い。

もう一つは、研修の内容である。ほとんどの道府県や政令指定都市が「年次研修」（基本的に強制参加）を実施している。自治体によって多少の差はあるが、多くが初年

次、三年次または五年次、十年次、二十年次の研修を設定している。内容としては教科指導に関するものが最も多く、とくに英語は小学校での教科化もあって突出して多い。ほかにも生徒指導、道徳教育等の研修を設けているところが多い。また、道府県レベルでは管理職研修など立場に応じた研修は必須として設定されているようである。さらに、参加人数はかなり限られるが、大学院の修士課程で学んだり研修生として大学や他の道府県等で学んだりする制度を設けている自治体も少なくない。

### 3 魅力的な研修の実施

ここからは、筆者のこれまでの経験から魅力的な研修とはどういうものかについての私見を述べたい。もちろん、ここで言う「魅力的な」とは単に参加者の関心を引きそうなテーマのことではなく、参加したあとに「勉強になった」と感じられるようなものを指す。

#### (1) 講師の人選

同じテーマの研修であっても、講師によってかなり印象が異なることがある。これについて対照的な事例を筆者が受けた研修から紹介する。いずれも「教育における法的問題」をテーマにした講義であった。

最初の講師は学校問題を多く扱う弁護士であった。話題は生徒どうしの事故に対する教

師の対応が保護者とのトラブルへと波及した事例への対処法であったが、この講師が語ったその対処法は驚くべきものであった。詳細な内容の言及は控えるが、それは「そんなことをしたら、火に油を注ぐだけだろう」と感じるもので、「それ以前にそのような初期対応をした教員を指導すべきである」と思うものであった。

次の講師は大学の法学部の教授であった。さきの弁護士の方があったので、「どうせまた学校の状態などを考慮しない机上の話だろう」という先入観をもっていた。しかし、実際の話が始まるとそれはみごとに打ち砕かれたのである。その講師は、学校で起こりうる事柄が法的にはどのような問題になるのかということをも、実際の事例をもとにわかりやすく説明してくれた。九〇分の講演がとて短く感じられ、もつと多くの事例を聞いてみたいと強く思った。

以上の経験から、講師の人選はあらかじめその人がどのような話をする人であるかをしっかりと調査してから行うべきであると思う。

## (2) 研修の形態と内容

研修の形態と内容に関しては、自身が受講者として参加した経験と講師として受講者から受けた印象や感想をもとに話したい。

多くの研修は一コマ六〇〜九〇分で設定されている。それに対して、すべての時間を講義だけに費やされるのは、受講者にとっては

つらいものである。自身の経験からそう思っているもので、筆者が講師の場合はワークシートの随時取り入れるようにしている。要するに、ただ座って聞くだけではなく、活動をおして学ぶ形式を取り入れるということである。

一方、話の内容として、当たり前のことを何の工夫もなく当たり前に話す講師の話ほどつまらないものはない。そこで、筆者が講師として話の内容を考える際にいちばん注意することは、受講者に「なるほど、そうだったのか!」と驚いてもらえる情報や、「よし、自分も取り組んでみよう」と共感してもらえる具体的な手法を示しているか、ということである。とくに筆者は受講者と同じ現役教師であったので、受講者の悩みや陥りやすい誤った指導方法などを話題にすることが多い。また、筆者が言及する指導の成果をより深く理解してもらうために、自身が指導した生徒の活動や発表の様子を映像で示したり、そこにいたるまでの指導過程を映像を交えて詳細に紹介したりするようにしている。

このようにすると、受講者からは「楽しく参加できました」「明日からがんばってみようと思います」「あつという間に時間が過ぎました」等の感想をもらうことが多い。

## おわりに―より身近な研修の機会―

ここまで官制研修を中心としてきちんと設定された研修のあり方について述べてきたが、ごく身近な環境の中にもとてもよい研修の機会があることを最後に述べておきたい。それは、同じ学校の教員どうしの学び合いである。具体的には、①日ごろから指導内容や指導方法について率直に話し合う機会をつくること、②作成した資料はすべて交換し合うこと、③お互いの授業を見学し合うこと、の三つである。ちなみに、筆者の前任校ではこれらが非常に高い密度でできていた。随時仲間どうしで情報交換をすることで、一人で考えるよりもずっと内容の濃い授業を創造することができる、ときどき他の教員の授業を見るだけで自分の授業の質を向上させることができた実感している。

ただし、そのような学び合いを行うには教員どうしの良好な人間関係ができていなければならない。もしかしたら、そのような人間関係づくりこそが教員研修の最も大切な第一歩かもしれない。

なお、先述した筆者の講演のすべてのタイトルおよび主な内容は、拙著ホームページ「次世代を担う先生方のための英語学習指導」で公開している。

